

東西文明の比較(22)

▼花の都長安▲

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

多くの日本人は、シルクロードに結びつけて「唐」をみているようです。そこには、仏教の伝来があります。

日本に仏教が伝来したのは6世紀中葉ですが、本格的な仏教の輸入は唐の前半期の7世紀です。唐都・長安は、ユーラシア大陸を貫くシルクロードの東のターミナル。

長安から博多・大阪・奈良・京都までを引き延ばして、それを「日本文化の源流」のひとつと考えています。「日本」という国名が成立した頃の日本は、仏教文化によって唐と結びついていました。その唐はシルクロードによって仏教文化の栄えた西域・インドと結びついて

ました。当時の日本の民族形成期の高揚感と仏教に対する好印象が、千数百年の時を超えて現代日本人の遺伝子の中に受け継がれています。正倉院御物といえはシルクロードやガンダーラを連想します。仏教の原点を求めて西域からインドへ旅した三蔵法師のイメージも重なるでしょう。

インドから漢代の中国に伝来した仏教は、南北朝時代に根付き、隋唐において北朝仏教と南朝仏教が融合して、唐代には玄奘・義浄に代表される教学仏教や善導によって大成された浄土教の隆盛、さらに不空に代表される密教が加わり、歴代皇帝による保護・尊崇とが相まって、唐は中国仏教の黄金期を迎えました。それゆえ唐を仏教王国、長安を仏教都市といいます。唐代の人口は、約5000万、仏教僧侶は50万を超えていたといわれます。100人に一人が仏僧でした。長安には正式の僧尼が2万人以上いたようです。

唐王朝は618年に、高祖・李淵により建国され、907年に朱全忠によって滅ぼされるまで、約300年続きましたが、名実ともに帝国の名にふさわしい偉容を保ったのは、630年の東突厥滅亡から755年の「安史の乱」勃発までです。安史の乱後、唐は甘粛省以西を失っただけでなく、

中国本土内にも多数の地方政権の半独立を許し、それまでの唐とは全く別の小国になってしまいました。政治史的には、太宗の「貞観の治」を含む初唐と玄宗の「開元の治」を含む盛唐を合わせた前期と、中唐・晩唐を合わせた後期に分類するのが適当です。

均田制・府兵制・租庸調制に代表される「律令体制」が完成したのは初唐であり、玄宗時代には既にその崩壊が始まっていました。安史の乱は、それにとどめを刺しただけです。とはいえ、文化的繁栄は、後期にまで及び、学術・文学の分野では後世に残る名著が次々に生み出されただけでなく、文学ジャンルが多様化し、木版印刷術も普及し始めました。

盛唐期

712年、玄宗(李隆基)が即位しました。玄宗の治世の前半は開元の治と謳われ、唐の絶頂期になります。この時期、唐の羈縻^{きび}支配と冊封政策は中央アジアにまで及びました。しかし、751年にトランスオクシアナの支配権を巡ってアッバス朝との間に起こったタラス河畔の戦い²⁾に唐は敗れました。

玄宗は、長い治世の後半には楊貴妃を溺愛して政治への意欲を失い、宰相の李林甫や楊貴妃一族の楊国忠の専横を許しました。楊国忠は、玄宗と楊貴妃に寵愛されていた節度使の安祿山と対立していました。危険を感じた安祿山は755年に反乱を起こしました。節度使とは、玄宗の時代に増加した官職で、辺境に駐留する藩師に軍事指揮権と一部の行政権を与える制度でした。北方3州の節度使を兼ね大軍を握っていた安祿山はたちまち華北を席卷し、洛陽を陥落させ大燕皇帝と称しました。都の長安を占領され玄宗は蜀に逃亡。その途中で反乱の原因を作ったとして楊貴妃と楊国忠を誅殺しました。失意の玄宗は譲位して皇太子を肅



8世紀ごろの唐と隣国図 (Wikipedia より改変)

宗として即位させました。

その後、唐は名将・郭子儀らの活躍や回鶻(ウイグル)の援軍によって763年に乱を平定しました。9年に及んだ反乱は、安祿山とその死後乱を主導した配下の史思明の名をとって安史の乱と呼ばれます。この安史の乱によって、唐の国威は大きく傷付き以降、唐は次第に傾いていきます。軍事力増強のために藩鎮を増やした結果、内地の節度使も増加しました。各地に節度使が置かれた状態は、後の五大十国時代まで続きます。

唐は中国史の中で最も国際性・開放性に富んだ王朝でした。しかも中国文化自体も最高潮に達した輝かしい時代でした。7～8世紀の唐は名実ともに世界の帝国であり、その世界主義は、国内諸都市における外国人居留地の存在、外国人使節・留学生・商人・芸人の偏在、外交・商業ルートによる外国文物の流入、芸術・文化における西域趣味、道教・儒教に対抗した仏教、さらにマニ教・景教・祆教などなどによって特徴づけられます。いずれもシルクロードと密接な関係を持っています。唐の都、長安は「花の都」といえるでしょう。

唐は日本の先生だった

「古事記」の時代から明治維新まで、漢文は日本の公用語でした。飛鳥・奈良・平安・鎌倉・室町・江戸時代と、わが国の役人や知識人たちは正式な書写言語として漢文ないしは日本語混じりの変体漢文を使用していました。その間に大量の漢語がそのまま日本語に入って定着しました。近世以前の日本の文字文化は、中国のお陰で進展してきたのです。

近代ヨーロッパより1000年も早く、科挙という実力主義で「民主的」な高級官吏登用試験を採用したのは中国(隋唐)です。科挙受験のために必要だったのは儒学です。儒教精神に基づく儒学は政治経済を重視したという点でまさに「実学」であったのに対して、仏教・道教の学問は「虚学」でした。

唐が中央アジアのトルファン盆地にあった魏氏高昌国を併呑して西域支配の道を開いた640年から、安史の乱が勃発する755年までが、唐がシルクロード東部を直接押さえ、東西南北の文物の移動と人的交流がとりわけ活発に行われた時代でした。この時代を中心に、日本は実に多くの物事を学びました。それ故日本は、必然的に長安・洛陽など唐の大都市を通じて、シルクロードとも密接に繋がりました。唐とシルクロードは、日本史の一部であるといえます。

唐は漢民族王朝ではない

唐建国の中心は鮮卑系漢人と匈奴の一部でした。当時の中央アジア東部を支配していたのは遊牧国家・突厥第一帝国(東西両突厥552～630年)でした。この強大な勢力を打倒することなしに、唐が人類史上に燦然と輝く世界帝国になることはありませんでした。ただし、唐と突厥との国際関係は、唐に先行する拓跋(鮮卑族の一部族)国家である東魏・西魏・北齊・北周・隋にまで遡らなければなりません。

隋を開いた楊氏も唐を開いた李氏も鮮卑系の「関隴集團」の出身でした。関隴集團とは、北魏の国防を担うエリート部隊であった六鎮³⁾の出身者が、北魏分裂後に関中盆地に移動して、現地の豪族と手を組んで出来上がった胡漢融合集團のことです。唐代までに活躍した匈奴・鮮卑・氐・羌・羯・柔然・高車・突厥・鉄勒・吐谷渾・カルルク・奚・契丹など中央アジアに存在していた各民族は、秦漢時代に「漢民族」に組み込まれていました。唐の世界主義・国際性・開放性は、もともと唐が漢民族と異民族の血と文化が混じり合うことによって生み出されたエネルギーにより創建された国家に由来するのでしょう。しかも一貫して多民族国家だったことにより促進されたものです。それは後のモンゴル帝国や現代のアメリカ合衆国と共通することです。唐には突厥人もいればソグト人・ペルシャ人あるいは高仙芝・慧超のような朝鮮人も阿倍仲麻呂や藤原清河や井真成のような日本人もいたのです。

■注

1) 羈縻：羈は馬の面繫(おもがひ)、縻は牛の鼻綱を意味し、漢字二文字でつながり止める、牽制するの意味。中国諸王朝が外族内部の行政組織をそのままにして外族を統御する伝統的政策をいう。唐では羈縻州といって外族の部落に州や県をおき、その首領に唐の官名である都督や刺史を与え、都護府がこれを統括した。(コトバンクより抜粋)

2) タラス河畔の戦い(中央アジアの覇権争い)：751年7月、ズィヤードの率いるアッバース朝軍と高仙芝率いる唐軍は、天山山脈西北麓のタラス河畔(現在のキルギス領)で衝突した。戦いの最中、唐軍に加わっていた天山北麓の遊牧民カルルクがアッバース朝軍に寝返ったため、唐軍は壊滅し数千人を残すのみとなった。高仙芝自身は、部下の李嗣業がフェルガーナの軍中に血路を開くことで撤退には成功したものの、多くの兵士が捕虜となった。唐側の被害は甚大で、イブン・アルの「完史」によると、アッバース朝軍は「唐軍5万人を殺し、2万人を捕らえた」という。

(Wikipediaより抜粋)

3) 六鎮：北魏において、北方の民族の侵入を防ぐために辺境地帯に置かれた以下の鎮(沃野、懐朔、武川、撫冥、柔玄、懷荒)を六鎮という。(Wikipediaより抜粋)